

My Page

石川県地域づくり推進協議会

Contents

▼巻頭特集

「石川の地域づくりの未来」

運営委員座談会・コーディネーター座談会

▼地域づくり交流

「ならどっとFM」

「NPO政策研究所」

「みのお市民活動センター」

▼地域づくり談議

能登編「能登半島での情報交流」

金沢編「健康と子育てと地域づくり」

▼地域づくり実践講座

輪島編「NPO入門講座」

▼交流とネットワーク

「第16回地域づくり団体
全国研修交流会 群馬大会」

VOL. **10**
2002.3

情報誌

新しい舞台

21世紀には新しい地域づくりの
方法や概念が必要なのかもしれない。

新しい知を創造するような
場をたくさん生み出してゆきましょう。

石川の 地域づくりの 未来

この情報誌も今回で10号になります。
準備号に「石川の地域づくりの未来を語り合おう」というテーマで
行った研修交流会の記事が載っています。
あれから5年、協議会はどれだけ進化し、発展したのであろうか。
そしてこれから、どこを目指すべきなのか。
運営委員とコーディネーターがそれぞれ、
本音で今後のことを語り合いました。
これはあくまでも一つの機会ではありますが。
今後も、協議会の活動を通して、議論を深めてゆきたいものです。

【出席者】 大湯章吉 (能登乃國ゆするぎ塾)

坂本 勝 (松任まつり保存会)

林 弥子 (まれびとピア懇話会)

中本安昭 (春蘭の里実行委員会)

永野弘樹 (小松青年会議所)

蔵 善義 (加賀市長公室政策課)

—— 本日は、協議会のあり方、石川の地域づくりの今後について、運営委員の皆さんが何を考え、どのような展望をもっておられるかを率直にうかがいたい。

坂本 ◆まず、この推進協議会が必要なのかということがあると思う。それは何故かということ、参加団体の当初の集め方が市町村の行政の推薦によって集まってきた。この協議会のメンバーが、この協議会を本当に必要としているかということ、大半が必要としていないと僕は思っている。

大湯 ◆協議会がなくてもいいというのはどういうことかな。

坂本 ◆地域づくり推進協議会がどうなるであろうか、協議会が地域づくりの団体に対してどういうメリットなり、有益な部分があるだろうかということであれば、一番問題であるのは、地域づくり推進協議会という組織が変わっていないのに、地域の皆さんの活動はどんどん変わっていていると思う。それと、運営委員が各団体の活動をしながらやっている、時間的にもとても負担が大きい。そのことによって、運営委員を望む方も少なくなっている。

—— それが本音やと思う。林さんなんか、以前から運営委員をやめたいと言われてきていますが、いかがなんですか。

林 ◆私個人でいうと、良かった点はもちろんあります。それは何かということ、私個人が地域づくり推進協議会の活動を通して、少しばかりでも成長できたというところにあります。なんで成長したかと言ったら、いろんな団体の活動を実際にみる事ができた。当初あった情報部会で情報誌の取材ということで、各地の団体を訪ね、その団体が抱えている問題点も、魅力も、どんな人が関わっているかも、その人たちが地域とどんなふうにつき合っているか、それぞれが違うところで違う活動をしていることを取材を通して知ることが出来たことが私にとってすごくいい経験になった。協議会からお金をいただいて、自分たちじゃ呼べない遠くの人の話を聞くことができた。ただ、運営委員会に出るということが次第に負担になっているんです。運営委員会自体、いつまでも古い人がいると、時代の変化に対応できないんじゃないかという気がします。だから、ホットな新しい血を常に入れる必要があると思う。その世代交代がうまくいっていないと思っています。運営委員の任期が2年で、2年でがらっと替わってもいいかもしれないけ



ど、事務局の異動もあるので、毎年3分の1ずつ替わってほしい。もちろん残りたい人は残ればいい。

〔アンテナとしての協議会〕

中本◆何にも分からない春蘭の里のメンバーが協議会に出させていただいたのは、県の地方課の方から出るように言われたんです。民間でやってる地域づくりの苦労というか、そういうものも直接話にだせるんじゃないかと、引き受けたのが実状です。何も知らないから、アンテナとして、地域づくり協議会を利用させてもらっている、非常に有難いなと考えています。全国大会に何回か、大勢で押し掛けて、みんなそれなりに力をつけさせていただいた。春蘭の里のやり方、先の見通しもついてきました。資金はないんですけど、自分達の考え方に共感というか、共鳴していただいた人たちに応援していただいています。立ち上げの時には、能都町のエンデバー21で応援していただきましたが、その後はほとんど自力で、いろんなことに手出しをして、まとめつつあります。

——永野さんは青年会議所ということで関わっていただいているのですが、そういう視点でみると協議会という組織はどのように見えているのかな。JCで活動しながら、協議会に入っている意味とか、どんなことがあるんですか。

永野◆青年会議所として出るメリットというのはほとんどないです。行政に対しても、青年会議所と言えば、会っていただけます。講師を呼ぶとしても、経済同友会の牛尾治朗さんや田原総一朗さんなど、全国レベルの方々にお越しいただいていてお話が聞けます。一番ネックになっているのは、知名度が上がらないということ、青年会議所と商工会青年部の区別がつかない人がほとんどですから。知名度をあげるのと、はくら自身も生き残りをかけていく上で、今までと同じようなわけにはいかない。皆さんがどうやっているのかを知るといっていい機会としてはいい。新しい知を僕らも入れていかないと、恐竜みたいに死滅するかなという危機感があります。そういう意味ではいいのかなという気がしています。

〔交流の場〕

——大湯さんは一番最初から関わっておられますけど、大湯さんにとって協議会というのはどういう存在ですか。

大湯◆交流の場でしょうね。いろんな団体があるけど、その多くは系列に分かれているでしょう。協議会も当初は市町村の推薦とかあったけど、現在はボーダーレスに近い。NPO支援センターはあるけど、NPO法人やNPO法人を目指しているところは対象になるけれど、それ以外のところにはあまり対象にならない。協議会の一番いいところは行政も肩を並べて入っているし、いろんな団体が自由に入ってこれること。問題はそ地域で何ができるか。何か小さなことで、地域の人たちと喜びを共有できることが地域での団体活動の基本だと思う。小さくてもいいから、地域で活動している人たちの交流を通じての気づき、自分を高めてくれるという協議会が大きな土台になってくる。自分を高めていくことで、自分の組織がリフレッシュするということになる。協議会というのはベーシックな部分を支えているんじゃないかと思う。ベーシックだから新しいことは、

なかなか出来ない。コーディネーターのリードで最初の半分はやってきたでしょう。それから半分は自主運営をやろうよという風になった。だから運営委員の方に比重がかかってきた。運営委員の人たちはそれぞれの団体を抱えている。だから大変だよ。でも自主運営をするということはそういうこと、それによって、自分達がやっているんだということを自覚することだ。運営委員の役割は大変かもしれないけど、ベーシックな部分は事務局でも、コーディネーターでもなくて、自分達が自ら担っていく、そして、今度新しく入った人たちは自分の研鑽にもなって、自分の活動、団体がリフレッシュ、リニューアルできるために、どう活かすかということを考えていただくことが大切かなと思う。

坂本◆スタートの時に、いろんなハードの部分を見てきました。神奈川へ行ったり、東京へ行ったり、神戸も行かしていただきました。その時、見てきたものは、ハードが立ち上がって来ていた。石川県の場合はソフトの部分でつながっている。みんなで使える建物があったり、フロアーがあったり、というようなことが自分たちの事業の目的として、話を出したこともあるんですが、無くてもできるであろうということでした。例えば、滋賀県のサポートシステムみたいな形で、あんな立派な建物に淡海プラザがあって、みんなに協議会自体の知名度が上がっていけば、この運営委員というのはそんなに負担にならないと思う。

〔行政は異質な存在〕

蔵◆行政ははっきり言って異質なんです。他の方は自分の組織を持たれていて、自分の意志でされている。私は行政としてサポートする側ですよ。サポートする側が同レベルで入っているのかなと、個人的には少し疑問に思います。サポートする方は一歩下がったほうがいいのではないかな。行政の職員として入ると、タマエでしか動けない所が当然出てくるので制約が出ます。足を引っ張る方になるんじゃないですか。

大湯◆行政から来ている人はみんな自己矛盾をかかえて、それをどこに吐き出すのかということが一番大事な部分で、だから行政を入れた。

蔵◆多分、ダブルスタンダードになってしまうんですね。

坂本◆なくしてしまえばいいですよと言った中で、ひとつ大事なことは、JCの活動においても、行政の活動においても、住民を見て活動すべきだから、市民団体がどういう活動をしているかを見る為にこの協議会があってもいいと思うんです。

蔵◆いいんですけど、運営委員のレベルである必要があるのかな。あくまでも地域づくりということで、市民団体の方がメインでされる団体ですよ。いろんな話が聞けることはいいのですが、ただそこで主義主張を言うのはどうか。

坂本◆その通りだと思うんです。今の状態が変わればいいねという話であって、僕は県がしっかり予算立てするというよりも、この活動自体



大湯章吉 (能登乃國ゆするぎ塾)



坂本 勝 (松任まつり保存会)



林 弥子 (まれびとピア懇話会)

がNPOになればいいかなと思ってるんです。存在価値はあるんです。それをどうやって活かしていくかというのが、今は見えていない。住民のみなさんに地域づくり推進協議会がどうしているか、見えてない部分が多すぎるというのが、無くしてしまってもいいという僕の理由なんです。来た人はみんな喜んで帰ってる。林さんも、中本さんも、僕自身もそうです。どこでも勉強させていただいた。

蔵 ◆今言ってるのは行政との関わりあい話ですね。

坂本 ◆蔵さんが行政の看板を背負って出て来ても、その意見でいいですよ。但し、僕は行政の担当を変わりましたと言ったら、いなくなるという今のやり方なんです。そんなやつたら、そのやり方で全部変えてしまえばいい。JC(青年会議所)にしても一緒だね。僕も現役のJCの時に担当であったために、たまたま代理出席してここに出て来たばかりに、これで8年間やってる。そういうような関わり話であって、その時にやるかやらんかの話やと思う。

[P R と ロ コ ミ]

永野 ◆いろいろなNPOとか団体さんがいらっしゃるじゃないですか。一番どこが困るかと言ったら、いろんなものがあるんですけど、行政とのパイプが全然ないし、いろんなお願いをしにどこにいけばいいかわからないんですよ。逆に行政がいると本音がしゃべれないという人が殆どなんです。そこらへんのアレルギーはあるけれど、行政との関わりが必要やという矛盾がある。

蔵 ◆ある程度の距離をもったまま、握手できるような。例えば、補助金とか出している関係もあって、難しい面が出てきますので。

大湯 ◆多分そうだろうと思う。自分の地域の団体との関係の担当とすれば、自分がその中に入っていて、自分で補助金を付けていたら、おかしくなるからね。それは分かるけれども、この協議会の中の運営委員に入った場合は、自分のところを見ると同時に、人のところを見れるわけです。

蔵 ◆自分のためにはなるといえるのは分かるんです。

中本 ◆春鶴の里としては、地域づくり推進協議会というのは非常に難しい組織だなと思っています。ただ、そのPRの仕方が足りないんじゃないかなと思う。口コミが大切ですね。

大湯 ◆多分、知ってる人はうまく利用してる。知らない人は知らないで消えていくし、知る必要もないという面がある。知りたい人はどんな手段でも情報を集める。欲しい人には欲しい情報が集まるものなんです。

樺 ◆参加団体には登録されているけれども、協議会のことはよく知らないと言ってる人を運営委員会に入れることがいいと思っているんです。というのは、運営委員会に出ることで、いろんな団体があることを知ることも出来るし、情報誌の取材などにも参加できる。取材に行ったら相互に話しあうことになるので、そういう深い突っ込みをする機会を意欲ある人に上手に

与えていけるかというのが地域づくり推進協議会が成功するかどうかのポイントだと思うんです。交流を必要としている団体とか、問題点を他から知りたい、探したいと思っている団体が入りやすいようなシステムなり、そういう機会を与えていないから、なんとなく、沈滞ムードになっているのではないかな。

——意図的にいろんな団体に入っていく必要があります。異質なものが入ってくことで、新しい気付きとか発見のきっかけになります。今の運営委員の世代交替とかメンバー替えの為には何が必要かという、そういう人材を育成する必要があるんじゃないか。滋賀とか静岡とかは、地域づくりリーダー養成塾のようなことを継続的にやってきています。そのようなことを協議会の事業として一方で行うこともいいかな。

【 ネットワークの広がり 】

中本 ◆この地域づくり推進協議会に入って、美川のはりんこ塾の中正さんから交流しましょうという手紙をいただいて、それから、金沢森づくり学校でいろんな講座をやっていますよということで通って、一応資格をいただいた。それから、いしかわ自然学校関係の一連の講座を一通りやりました。今度は、里山保全リーダーの養成講座にも参加します。そのようにつながってきているのも、協議会に入ったおかげです。横のつながりができましたし、協議会に参加させていただいて、九州から北海道から、交流があります。

——行政マンがこういうところに入っている意味としては、民間の人といろんなネットワークを広めていくということ。自分が前面に出るというよりは、そこに席を持っていることによって、得るものが多いのかな。

中本 ◆こういうところに参加していることによって、行政の人も、例えば、行政も合併の話が進んでいますが、能都町だけではなく、鷹りにこういう人がいますよと、行政の人がピックアップしてまとめていくこともできるんじゃないかなと思う。

永野 ◆今年、小松で「こまつまちづくり交流センター」という機能が出来たんです。もともとのきっかけは2000年にいろんな団体と青年会議所が事業をやり、終わった後に、来年以降どうするかと、いろんな団体が集まって話をしたんです。市のスタッフにも出て来てもらい、そこで話しをしたことがトントン拍子に出来た。多分、行政としても、関わる上で、一団体と相対するよりも、いろんな団体でやった方がよい。

大湯 ◆行政がやるべきことと民間がやるべきこと、それがどんどん変わってきている。逆に言ったら、行政がやることが支援と言ったけど、本当に支援が必要なのというところまで来ている。今まで行政がやってきたことが、本当に行政が必要があることなのか、という部分がかなり出て来た。

——行政も地域づくりの一つの主体でしかない、地域づくり団体と対等につきあうというスタンスの方がいいのではないかな。支援という概念で考えている限りは、遠慮しちゃうから、面白くないんじゃないか。行政は行政で出来ることをどんどんやればいいし、民間は民間で、行政を当てにせず、どんどんやるという風な姿勢にならない限りは魅力的な地域にならないでしょう。そういう風に考えれば、対等な立場で出て来て、率直に議論するということ



中本安昭 (春鶴の里実行委員会)

が、これから先、ますます重要になる。

蔵◆もし、そうであるならば、出方が中途半端というところがあるもので。

大湯◆行政の中で皆さんとお話して、行政の代表としてローテーションで出ていただいてもいい。

永野◆役員を交代して人事を変えていくというのは場づくりということでもいいんですが、発展形として、卒業された方々はこの会合なり、地域に対してどうするのという、新しいイメージ的なものがないといけない。たとえば、別の交流倶楽部みたいなものを作って、年に何回かするとか。

【 どういう方向を目指すか 】

——地域づくりということで、どういう方向を目指すかということが本質的に重要なんです。春蘭の里みたいに事業を展開し、地域の中で人・もの・金・情報を回すような仕組みを作って、地域にインパクトを与えていくような志向性をもった組織の連合体、ネットワークになれば、本当に強いものになっていくのではないかな。それが地域の活性化ではないか。そういうことを促進するのが協議会であり、きっかけを作っていくことがコーディネーターの役割かな。

蔵◆ボランティアをやっていく上で一番大事なことは、収益性の問題になってくるんですか。

——収益性というよりも、回るかどうかということです。

蔵◆回すための収益ということですか、熱意よりも。

——熱意が持続するためには、回転するためにはお金も大事なんです。多くのNPOが困っているのは資金繰りなんです。

蔵◆収益性が低いとやれないということですか。

——純粋ボランティアでは続かない、もたないということです。

蔵◆それはよく言われていますよね。

大湯◆事務所構えたら、電話もいるでしょう、車もいるとなると、法人になったら、必要経費は収益事業がなかったらまかなえない。

蔵◆カンパをずっと集められる構造ということですね。

大湯◆カンパでなくて、事業をやることによる事業収益を上げて、自立するということです。寄付行為にたよっていても、寄付はいつ切れるか分からない。そうすると永續できない。

蔵◆原則は収益ベースのボランティアという形になるんですか。

——もちろん、それだけではないんです。会費を集めて、それを元手にしながら、事業を行い、会の事務局を維持している、石川の森づくり推進協会のような組織もあります。そういう組織の場合でも、何が重要かという、成果なんです。活動の成果を金を出してくれている人たちにフィードバックできないと、いいかげんにせいや！と言われるということです。そのためには、ちゃんとした実績を残して、次につながるようなことをしてかないといけない。

大湯◆地域づくり団体がいろんな分野で自立して、自分達の金を払ってもやれるようなネットワークをできるとか、自前でできるようにならないと。

——刺激的な場があるとか、広がりのあるネットワークになっているかということが問われている。

【 N P O は 万 能 か 】

大湯◆地域づくり団体が行政といい関係になっているところが少ない。そこをお互いがなんでかということのを少し考えないと。NPO団体でもそうですよ。行政とうまくいかなくて悩んでいる。行政はNPOを育てるために委託事業を出すと言ってるわけでしょう。NPOは行政に、金もらうけど、なんで行政がすべきことを私達がやるんだ？となる。そういうミスマッチをやってるからおかしい。だから、何を行政はやるべきなのか、NPO、民間は何をやるべきかをきちんと明確にすれば、私達がやるのは当り前でしょうとなる。

蔵◆たしかに、NPOも市なりの委託事業で回ってるところもありますし。

大湯◆行政はNPOに委託して、育てるということが足りない。NPOが小学校から中学校、高校と育っていくように自立するまで育てる。

永野◆NPOに対してオールマイティのような存在という風にとらえていられるように感じてしょうがない。新聞にしても、NPOの活用ということをよく書いていますが、本当に、日本におけるNPOとヨーロッパとかアメリカと全然ちがいますよね。今一つ確立されていないような気がするんです。

大湯◆いろんな活動、いろんな種類を含めて、日本ではNPOと呼んでいる。NPOってこれだというものはない。

永野◆大阪NPO支援センターというのがあって、その代表幹事というのが青年会議所のシニアの方なんです。その方に講演に来てもらってNPOについてうかがった。例えば、おばあちゃんが徘徊してどこかに行ったときに、昔なら助ける組織がありました。それはどうなんですかと聞いたら、それもNPOかもしれないという。

大湯◆非営利ですから、利益を分配しないという点だけですよ。営利組織との違いは。

道路や水道などの最低限のインフラは広域ネットの行政がやらないといけない。イギリスのグラントワークの形でやっていると、誰がどこを担当するか分かる。

——福祉もそうだと思うんですが、高度な医療を必要とする人と完全に寝たきりになった人は民間のNPOではフォローできない。しかるべき、高度医療技術とスタッフを有した専門機関がカバーせざるを得ない。一方自立の可能性を有した人たちについては、地域の中で生活し続けることができるよう、地域の中に小規模でいいから、きめ細かいサポートをする民間の組織がNPOのような形であればいい。必要性は両方あるので、いかにそれをうまく組み合わせていくかを考えないといけない。

蔵◆収益にならない部分は行政が担わないとだめでしょうから。

大湯◆グレーゾーンがあるけれど、それをつなぎ合わせていかないとけない。それを担う場として、協議会の存在がある。



永野弘樹 (小松青年会議所)



蔵 善義 (加賀市市長公室政策課)

持続可能な 地域づくりを

【出席者】 赤須治郎 (赤須企画事務所)

濱 博一 (アスリック)

伊藤数子 (バステラボ)

高峰博保 (グルーヴィ)

高峰◆情報誌も今回で10号になります。準備号も入れるとすでに10回の発行を数えましたが、全国の研修交流会に参加したり他県の方々と話した感触では、地域づくりの状況はそんなに変わっていないと感じています。もちろん、NPOという新しい動きが急速に生まれ増殖しており、この新しい組織形態やその活動が地域に与えるインパクトはかなりあると思います。ところが、既存の地域づくり団体、その活動内容、そして地域づくり推進協議会は、進化・発展しているとはあまり感じない。

これから先、石川県の中で地域づくりというキーワードで何ができるか、協議会をどうするか、コーディネーターとしてどう関われるか、など課題は沢山あります。

今回の座談会は、あえて運営委員の方々と分けてみました。本音を言えばいいんじゃないかと。そこを明解にすると、コーディネーターの利用の仕方が団体に分かりやすくなるのではないかな。

【 構 造 改 革 の 必 要 性 】

濱◆以前、佐々木先生を囲んで話した時にもチラッと出ていたことで、『住民参加の地域づくり』のレポートでも書いたんですが、「コーディネーターみたいな人がちゃんと育てないとダメなんじゃないか」という議論をずっとしています。でも変わってないですよ。『地域づくりのコーディネーターを真剣にやればやるほど、自分の首がどんどん締まっていく』という構造は全然変革されていない。どうバランスをとるかが、相変わらず個人に任されている。そこにコーディネーターの限界が出てきているのかなと率直に思います。

伊藤◆私達コーディネーターは団体の会員じゃないから、できるのはお手伝いです。会員本人たちが本当に自分達で「何とかしよう」としてないかったらどうにもならないことです。それなのに、よく「アイデア下さい」とかお聞きします。アイデアは出しますよ。でも、本当に実行するかどうか、やってみて失敗するかしないか、全部含めて自分達で悩んで、やってみないことにはどうにもならない。そこをよく勘違いされませんか。

濱◆勘違いされていますね。すぐに出る効果が欲しいんですよ。でき

るんだったら社会はもっとよくなってるはず。僕は神様でも仏様でもなくて、たまたまちょっと情報のアンテナが人よりも広がったり敏感で、そちら方面で飯を喰いながらやってるから、たまたまノウハウが貯まっている程度です。

【 コーディネーターの役割 】

赤須◆コーディネーターの役割について考えさせられたのは、NPOの法人を作る時に、監事やってくれと言われたこと。監事はNPOが理念通りに運営されているかどうかをチェックする立場の人。会社組織という監査役です。法人立ち上げの話に入って聞くと、厳しいことを言う人がいない。特に、親方が一人いて周りに信奉者がいて団体を作っている場合、よく話しあっているようで大事な話が抜けている。一番抜けているのがお金の話。親方が大半のお金を出して、赤字が出てでも引き受ける。すると周りの人たちはそこに触れると自分が負担しないといけなとかいろいろあるものだから、話ができなくなっている。お金に限らず身内はそういう傾向が強いよね。その時に、客観的な立場で問題点をえぐり出して指摘する。そういう役回りの第三者が必要だなと思う。

つまり、地域づくり団体は同じことしか話してなかったり大事な部分に気が付かなかったりする。そういうことを指摘する役割がコーディネーターじゃないかな。

もう一つは、例えば大湯さんや森山奈美さんたちは、地域の中でリーダーに育ってきています。すると、リーダーなんだけど地域での発言力が弱くなっていくんですよ。何かやるときに、地域全体を考えて物事を進めようとしても、「あいつはどここの人間だ」という見方が地域内にはある。御祓川の森山だと「全てが御祓川にいつちゃう」、「全てがゆするぎ塾にいつちゃう」みたいな見方をされて、力が付けば付くほど地域内で活動できにくくなるという状況がある。その時に、地域の利害と関係ない人間がコーディネーターとして入って関わる必要性が出てくる。各地でみんなが力をつけるに従って地域から浮いてくるのを、何とかしてあげる役割が求められているんじゃないかな。

濱◆このあいだ、僕と赤須さんが理事をやってるiネットというNPO支援のNPOが合宿をしました。「NPO支援と言っているけど、実は何もやってないんじゃないか」ということで、僕らはどういう役回りをしないといけないのか随分議論した。その時、いくつかカタカナの単語が出てきた。コーディネーター、地域づくりのリーダー、プロデューサーとマネージャー。これらは役割が違う。ところがあまりにもぼやけているから、みんな違いがよく分からない。ある程度は、僕ら自身が使い分けられないといけないのかなと思うんですよ。今、赤須さんからリーダーとコーディネーターの話ができましたけど、マネジメントせざるを得ないから、コーディネーターというよりはマネージャーじゃないかという気もします。マネージャーというと完全に組織の中に入っているイメージだけど、少し離れたところにいるマネージャーみたいな部分もあるんだろうし、プロデューサーとどう違うんだというのがある。

【 機 能 と 分 担 】

伊藤◆明確ではないですね。職業としてのプロデューサーやコーディネーター、プランナー、ディレクターというのもあるし、すごく曖昧で

すよ。

赤須◆グループ運営をやっていく時に、社長に当るのがプロデューサー。社長が会計をやっちゃうと、その組織は硬直化しちゃうから、会計は別にしないといけなくて、リーダーシップを発揮するプロデューサーと、お金を管理するマネージャーは別にする。なおかつ第三のセクターとして、くっつけたり離したりする役割のコーディネーターを置きなさいという、三役があるんじゃないかな。

濱◆アメリカのNPOもそうで、生れたての時は三役を全部一人でやってる。事業が大きくなっていった時、できる人を代わりに据える。だから、大きくなったNPOに管理として入る人を養成して斡旋することだけをやってるNPOもある。

赤須◆例えば「情報発信に技術があります」とか各分野の専門技術を持つ人たちは、コーディネーターというより、アドバイザーだと思う。コーディネーターの役割は、今流行りの言い方をすると、「協働」の関係を創り出していく人たち。その専門技術を持った人たちがコーディネーターではないかな。それを世古一穂さんは協働コーディネーターと言っている。地域づくりの団体と地域住民との間、行政や企業との間をつないでいく役割、あるいはグループ内でうまく動いていかないとことを動かしていくような技術的アドバイスをしていく。そういう役割がコーディネーターだと今は思ってます。

協議会が出来た当初は、それぞれ自分の専門分野で、例えばリクルーティング、広告、まちづくり、都市計画など、「自分はこれやってます」という専門技術を提供してきたわけですけど、今はだんだん、それぞれのグループ活動が盛んになったり停滞してくると、その運営に対してアドバイスする役割の方が重要なんじゃないかな。

〔 本 当 の パ ー ト ナ ー 〕

高峰◆今の協議会の中におけるコーディネーターの位置付けからすると、赤須さんが言われるアドバイザー程度です。せいぜい1回、2回、継続的に行っても3回くらいまで会合に付き合っ、最初に30分が1時間まとまった話をして、気付いたことを言ってあげるくらいだよ。この機能だけでずっといいたら、多分変らない。

パートナーとして継続的に一つの団体や地域と組んで、新しい事業を立ち上げたり、新しい仕組みを創っていくところまで、コーディネーターが関わればいい。そのためにどうフレームを作り変えないといけないのか。コーディネーター派遣というメニューでやってる今の仕組みでは、無理なんだと思います。

商工関係の事業で、タウンマネージャー派遣というメニューがある。それは、半年間ぐらいずっと一つの地域に派遣され、商店街の活性化など具体的な活動を継続的に行う。極端に言うと常駐するぐらいその地域と関わり、ということまで来て

いるんです。

伊藤◆コーディネーターの側の構造も変わらないと出来ないし、グループの側の構造も、金銭的な背景も整わないと出来ませんよね。時間とエネルギーをお互いにきちんと作りましょうというフレームを作ってしまうと。

〔 相 性 と 地 域 性 〕

濱◆人間と人間だから、グループとの相性もあると思う。もう一つは地域性。僕なんかは金沢で仕事してるでしょう。家にほとんど帰っていない。そうすると七尾のはずなのに、七尾や奥能登のことをかまえなくなってきた。『春蘭の里』や『金蔵』がずっと気になっていて、彼等からも「来てね」とは言われているけど行けない。やっぱり中能登なり奥能登に、直接のフィールドで活躍できるコーディネーターがいて、なおかつ、その人が地元の人達と相性がよくて、更に金銭的な話が整わないと、縁組みが成立しないんですよ。コーディネーターを意図的に作ると思ったらおかしいけど、金沢近辺にしかないのが良いんですよ。

高峰◆でも、中途半端に近い所にいると、力が弱くなる。金沢にいるのもそれなりの意味があるんです。異質な存在であればあるほど、触媒効果が高い。自分がそこに住みはじめると気付かなくなるという面もある。まれびと性を徹底していくことも一つの役割かな。しっかり見つけ、ハッキリものを言うとはそういうことだと思う。

〔 地 域 の 人 が プ ロ デ ュ ー サ ー 〕

赤須◆濱さんが言ったのはコーディネーターではなくて、プロデューサーのような気がする。奥能登全体を眺めながら「これをこう盛り上げていこう」というのは奥能登の地域づくりのプロデューサーのセンス。コーディネーターはそこまで出来ない。私が考えるコーディネーターは、案外根無し草であまり地域にいない。ふらふらしてるから好きなことが言える。プロデューサーは地元をもっていて現場を持っている人なんじゃないかな。

伊藤◆私は赤須さんに近いな。私にとってのプロデューサーは、生み出すとかつくり出すという感覚がある。

赤須◆生み出す人はやっぱり地域の人で、地域に根をおろしている人。

伊藤◆住んでる所だからこそ、その地域を愛してやまず、何とかした





赤須治郎 (赤須企画事務所)

いという思いが沸き上がってきて、そのエネルギーから地域のことをやってる。やっぱりプロデューサーはそこにいる人ですよ。

濱◆それでは僕らは一体どういう存在なんだろう。

高峰◆自分が主体になって、薬師の里でトップリーダーになって動いているのであればプロデューサーですが、あくまでもメンバーとして関わっている限り、組織内における一つの機能として、外とつなぐコーディネーター

役を期待されているとも言える。

濱◆そうそう。何かあっても渉外担当になっている。

伊藤◆事業やったりする時には、プランナーという役割も担っていると思いますけど。

濱◆その他の団体との関係はなんだろう。それはアドバイザーかな。

赤須◆アジテーターでしょう。

[微妙な立場]

高峰◆関わる以上、何らかの成果やパフォーマンスが将来につながっていくことにおつき合いたいと最近思っている。アドバイザーで1回か2回呼ばれておしまいというのは正直やめたい。いろんなことに首突っ込んで、どれもこれも中途半端で何も変わっていないというのは、そろそろ卒業させていただきたい。

伊藤◆行ってその人たちに会ってしまったら、エネルギーや情熱に気持ちが入って中途半端に後髪引かれたり。でも、「帰って仕事しない」と思うから帰って来るんですけど、「あと30分いて、もう少し話しすれば良かった」となったり、何かアイデア頂戴となった時には、これ以上責任持てないという微妙な状況があるから皆さんに冷たいことを言ってしまう。「今度何とかしましょうね」とか言われても、きっちり「そうですね」と返事が出来ない自分につかりする。すごく身体に悪いなと思ってる。不健康ですよ。

もっと現実的にいうと、お金があれば次から仕事として来れるでしょう。でも、そこにお金はないことが明確な場合はどうしようもない。「構造を変えない」というのはそういうことも含んでですよ。

高峰◆今のコーディネーターが置かれている立場からすると、すごく限定された機能しか果たせない。これを突破するにはどうするかがテーマなわけです。

協議会のメニューに、一つのところに徹底して突っ込んで関れるようなメニューを用意することが一つのアプローチかもしれない。

濱◆先回の輪島の「わんたき」の反省会で、「地元でもコーディネーターが必要ですよ」という意見が出て、我々は「しめた」と思った。そこに気がついてくれて良かったと。それは結局は、コーディネーターの役割がどれだけ大事なのかに気がついたということでしょう。その気がきが広がらない限りは裾野が広がっていかない。

高峰◆能登でも加賀でもコーディネーターを養成しようという話は面白くて、能登人が加賀や金沢、白山麓に来たりして、いろんな刺

激を与える存在になってくれればいい。

[仕事にならないコーディネーター]

伊藤◆会社に売上が上がらないことが問題で、上がれば出やすい。そういう側面もありますよね。

高峰◆みんな僕らの置かれている立場が良く分かっていないんじゃないか。それが明確にされていくために今回の座談会企画があるんです。コーディネーターが何を考えているか、どんな立場にあるのか。

濱◆イヤなのは、「10数人もコーディネーターがいて、出て来ているのは何でこの4人なんだ」という話があるじゃないですか。「好きで出て来てるんだろう」と言われると身も蓋もない。

高峰◆「コーディネーターとは何か」が、参加団体に見えてないと思う。好きで地域づくりに関わっている人ではなく、業として関わっていることをまず明確にすべきですよ。「仕事なんです」と、「仕事の一部の可能性もあるよ」と。

伊藤◆しかも一つ一つの地域づくり団体とコーディネーターとの関わりより、もっと分かりにくいのは、協議会の中におけるコーディネーターの役割じゃないですか。

濱◆必要経費も出てないものね。会社の経営者としては失格なんです。会社の売上げを上げないといけなく立場なのに、コーディネーター個人に対してしか支払いしてくれない仕組みだから、個人のポケットに入る。これはある意味で背任行為なんです。

高峰◆いったい何してるんですかと言われますよね。

伊藤◆小遣い稼ぎに講演に行っているようではね。

濱◆午前中も、県のNPOセンターの運営委員会があったんだけど、会社休んで出てるわけですよ。

高峰◆今のメニューでいうと、地域づくり実践講座や地域づくり談議は予算をまとめてつけて、パッケージで委託みたいな形でまかせることも可能じゃないですか。

濱◆そうすると、それは会社の仕事になるから楽なんだよ。

高峰◆事務局も細かい予算管理しなくていい。

濱◆ただ、契約の仕方が随意契約になるでしょう。細かい金額だから大丈夫だと思うんだけど。その言い訳が端からみて大丈夫か。

高峰◆コーディネーターが所属してる会社が受ける、という前提がいりますけどね。

伊藤◆そうすると平日の昼間でも大丈夫。

[協議会の未来]

高峰◆協議会という組織をどうするかの話もある。例えば富山は休眠状態にある。滋賀県は無くした。これを有効に機能させるにはどうしたらいいのか。石川県は機能してる方なんです。

伊藤◆運営委員の方々が活躍しているからじゃないですか。

濱◆滋賀県の淡海ネットワークセンターの阿部さんの評価は、民間のコーディネーターが県の金をうまく活用しているからやと。県の職員でない人がアイデアを出してきて、うまく参加団体に問題提起をしながら動かしている。それに対して県があまりとやかく細かいことを言わないで、大枠で予算をつけて容認しているところが素晴らしいと。

高峰◆事務局をどこかに委託しちゃうことも検討課題。沖縄や秋田は



濱 博一 (アスリック)

民間に委託しているはず。それも含めて組織としての自立を考えないといけないのではないか。県からの援助が減るかもしれないけど、本当に力のある地域づくり活動をする組織体、ネットワークにしていけば、自分達で金を出してもいいから事務局機能をきっちり創って、ネットワークで情報発信をやりながら、全県的に面白いことをやろうよ。そのコアの組織として協議会を位置付けるのであれば、事務局は独立させるとか委託しちゃうとか考えた方が良いかと思う。

伊藤◆金額によるけれど、協議会を会費制にしたらどれくらいが残るかな。各団体にとって、協議会に参加するメリットを自分達が見い出して持って帰っている団体って、ほんのわずかじゃないですか。

高峰◆研究会みたいな形にすればいいかもしれないね。協議会の中に勉強会があって、出る時は会費が要するという形にする。

伊藤◆私は全部会費制にすべきだと思う。

濱◆そういうプレッシャーが協議会にかかってきてもいい。

【リーダー養成塾を】

濱◆岡山は地域づくり推進協議会は動いていないけど、代わりに「桃太郎塾」が動いている。毎年20人が30人か枠を決めて、月1だったか前期後期に集中的な講義があって、レポートを書いたり、イベントを実際に自分達が実行委員会を作ってオン・ザ・ジョブトレーニングでやってみたりのトレーニングを受け一連の講座があるんです。その方がすごくて、OBは会員になるからどんどん会員が増えていて、岡山では盛んです。

赤須◆静岡が未来塾を10年間やって、去年で一区切りで止めたんですが、その中で活躍している人は全員が行政の人。2年間続けて自分で研究テーマを決めてレポートも書いて、勉強にはなる。そういう人達を地域プロデューサーと言っている。

濱◆滋賀県も市町村職員が沢山入っている。僕らみたいな会社や企業はそんなに多くないはずですよ。市場が狭いから、そういうところで勉強しても、それを発揮する場が地域の中になくするのは事実だと思うな。

赤須◆就職先としてのNPOみたいになってくれば、力を発揮できる。

高峰◆地域づくりに限定する必要はなくて、地域の中でどれだけ面白いことをしていくか。企画とか経営管理の方法を学べる講座をやって、そこで立てた企画を協議会の事業として実験できるメニューを考えればよい。

地域づくりシンポジウムなどは、講座に出た人たちが企画をつくり、実施してみる形にできればいい。

赤須◆滋賀県方式だね。協議会事業としての人材養成塾にみんな派遣してもらう。

高峰◆そうすると、それぞれの団体が新しい事業に取り組みやすくなる。協議会という組織も新しい事業に常に取り組んでいかないとけない。

もっと多様な団体に参加いただくために営業も要るのかなと思う。メンバーが固定すればするほど発展しなくなる。刺激を与えるためには、新しい人や団体を入れるしかない。

【地域づくりというビジネス】

高峰◆多くの団体は金が回る構造になってないから、同好の志が集ま

っている範囲では続くんだけど、新規で参画して来る人がいない。

伊藤◆「儲からない」とか大変じゃないですか。「疲れただけが残る」とか「もうこれ以上は母ちゃんに叱られるから出来ん」という声が、冗談に聞こえなくなる瞬間が来る。そうすると終わるんですね。お金だけじゃないけれど、そこに新たな構造が作れていけば継続できるし、新たな人にも関わっていただける。

濱◆事務局は総務部地方課じゃないですか。

僕らは「参加メンバーを多様化しよう」という話までいったけど、主管は縦割りできっちりでよね。「縦割りを何とかしようよ」と言うのは簡単だけど、実際には動かない。

参加団体は多様で、中でも「産業起こしをしよう」というところにはもう一歩飛躍して欲しいという中で、実際にもう一段上がると、いきなり商工労働部の担当になるんですよ。その時に商工労働部の人が、「そういう団体がいたんですか」となるようではマズイと思う。そうなる前から商工労働部にも参加いただいくことが重要かもしれない。

赤須◆緊急雇用創出特別交付金で、商工労働部が2000万円をコミュニティ・ビジネスに出すんですよ。そういう説明会を、協議会の総会でやってもらうといいね。

伊藤◆まだまだ、地域づくりをしている団体の方々に、お金の話はしていないです。「きちんと儲けなさい」とか「運転資金の必要性」とか、商売のような印象のあることにはタブー意識があって、「そんなのためにやってるんじゃない、地域のためにやってるんだ」という声が多いでしょう。

濱◆男の人に多いね。女の人は分かっているみたい。

赤須◆「地域づくりとビジネス」と言ったら、「ビジネスと付けるだけでイヤだ」と言われますよね。

伊藤◆そういう方向もあるし、継続するためには必要なことだと、皆さんにも理解いただかないといけない。意識的に強調していくことも一つの方法ですよ。

濱◆外貨獲得の方法もあれば、地域の中で回すコミュニティ・ビジネスみたいな方法もある。「ビジネスと付いたら商工労働部で、総務部は関係ない」という話ではないから。

高峰◆ポイントは、「人・モノ・カネ・情報が地域の中で回る構造を作ってはじめて持続する社会が作れる」ということ。それに皆さんに気付いていただかないといけない。将来世代にわたってまで持続することを考えると、「趣味でやってる団体の活動では、次に繋がっていかないのではないか」という問題意識を持ってほしい。

受け継ぐことでもなくて、自由に新しい事業や活動が展開しやすい地域を創造していくことが重要。それをいかに仕組むかがコーディネーターの究極の役割かなと思う。

赤須◆そういう意味では、やはりコーディネーターだね。プロデューサーではないな。

高峰◆主体はあくまでも地域の人々です。



伊藤数子 (バステラボ)



高峰博保 (グルーヴィ)

地域づくり交流

徐々に形成されてきた「奈良町」

昨年の『地域づくりわんたたき』に
ゲストでお越しいただいた、
『ならどっとFM』の金城さんが
活躍する奈良を訪ねた。
『ならどっとFM』の経営する『蔵部』で、
奈良町で活躍する人達に
まちづくりについてお話をうかがった。



出発点は「奈良町倶楽部」

松山◆まちづくりのグループを作って14年くらいになる。まちはどんどん過疎化し、お年寄りの町になっていた。「何とかしないといけない」と、町並みの保存と町の活性化のために「奈良町倶楽部」を立ち上げた。生まれたときからずっとここに住んでいる方が多く、自分たちの町の良さをほとんど知らず、町の歴史や素晴らしさについて認識がなかった。「このまちを活性化するためには、住んでる人たちにこのまちを認識してもらって、このまちを好きになってもらわないといけない」と、古いおうちを借りて、家の中で眠っている宝ものを借り出したり、あるいは大正時代や昭和の初めの頃の写真といった昔のものを借り出して、まちの歴史展を始めた。また、お年寄りの方たちから聞き取り調査をやったり、というふうに活動を始めていった。

当時、「奈良まちづくりセンター」の木原さんも一緒になって、「奈良町博物館構想」を作った。これは木原さんの発想なんですけど、古い町家を改造して、そこに展示物をつけて人を誘致し、ある程度の観光地化をしていく。それで人が集まるようであれば、活性化が図れると。その第一号として、私の実家を改造して「奈良オリエント館」というのをつくり、ベルシャの文物を展示した。

当初、奈良町の歴史的町並み保存をしよう、活性化をしようとして行政に働きかけた当時、行政はどこ吹く風みたいな感じだった。ところが活動を始めてしばらくすると、行政も理解をしてくれて、売られる土地を積極的に買い取ってくれた。「音声館」とか「格子の家」とか、基幹になる建物を行政が建てていった。



金を付けたりしているんですか。

松山◆我々がまちづくりをはじめて3年ほどしてから、景観形成地区に指定された。指定には強制力はなく、つぶしたり建てたりする時は一応届け出だけをしないと。その代わりに、表から見えるファサードの部分の修復に関しては、市で補助金を出します。上限が1000万円で、修復の八割まで。1000万までいく家は殆どないですけどね。結構補助金を利用する人が多くなった。徐々に町並みがちよつとずつ整いはじめてきたのには、やっぱり補助金が大きな役割を果たしている。

博物館構想でいくつか建物が出来てきた頃に取材が入って、テレビや旅行雑誌なんかでどんどん紹介され、人が集まってくるようになってきた。同時に、それに目をつける人も増えてきて、「表を改造して何か店をしようじゃないか」、あるいは「ちよつと食べ物でも出したら」と、どんどん店が出来てきた。

人も増える、店も増える

高峰◆地元の人が商売を始められているんですか。

松山◆地元の人も、外から入ってきた人も結構います。ただ、ここに集まってくる観光客の方は、年齢的には50前後のおばさんが多い。お店にしても大体それに合うお店が出来てきて、比較的落ち着いた雰囲気になっている。

市が「音声館」という建物を建てて、わらべ歌の普及をはじめ、シルバーコーラスができ、それがものすごい人気なんです。お年寄りの方も餅つきの手伝いにきたり、お手玉の普及の手伝いにきたり、自分からシルバーコーラスで唄われたりという形で、



松山 隆
(株式会社松山 代表取締役)



金城真砂子
(株式会社奈良シティエフエム
コミュニケーションズ 代表取締役)

街並整備と補助金

赤須◆それ以降、行政は買い上げた土地で色々な施設を作ってきていますが、町並み整備に関しては補助

随分イキイキとしてきた。

面白いことに、わらべ歌の普及は三世代交流ができるんですね。わらべ歌には遊びが必ず伴う。わらべ歌を唄って、縄跳び、毬つき、お手玉をしたり。子供達がそれをやると、お年寄りの方たちにしてみれば、自分達が小さい頃に培ってきたものだし、「ちょっと貸してみい。私がやってやる」とやったら、「へえ、おばあちゃんすごいな」と、今まであまりコミュニケーションがなかった三世代の交流が図れる。10月には『わらべ歌フェスタ』をして、その祭りだけで2万人ぐらいの人が来られる。

赤須◆それはどこでされるんですか。

松山◆まち全体です。このまち全体を一つの会場として、いろんなところで行われます。

コミュニケーションがテーマ

松山◆奈良町もそういうことでだんだん活性化して、町並みの保存と活性化はこのまま順調にいけば達成しつつある。我々としては、その次を考えないといけない。今まではハードウェア的なことを主にやってきたんですね。今度はソフトウェアを充実させていかないといけない。そのためには、習慣、風習、祭、「だんだんさびれてきたものを復活させようじゃないか」ということを最近やりはじめています。それと、人々のコミュニケーションをもっと強くして、年寄りや若い人たちの横のつながりをもっと強くしていかないといけない。

我々のコンセプトは、「住んでいる人にとって良いかどうか。住んでいる人にメリットがあるかどうか、住んでいる人に気持ちのよい心の安らぎを与えられるかどうか。そこが一番中心的なものだと思うんです。

高峰◆観光客に対する教育というか、「このまちで楽しみたいときは、これだけは心掛けて下さい」という呼び掛けが要るように思うんですが。

松山◆一つは観光に来られた方への接し方だと思うんです。「どこから来られたんですか」と一声かける、観光客と地元の方のコミュニケーションが大切です。「あそこで声かけてもらって、よくしてもらった」となれば印象が随分ちがう。それによって、来る人々も変わってくると思うんです。

アナログなまちから最新情報を

濱◆『わんたき』の時に、「観光を見直すというところからFMがはじまった」と言われているんですが、FMと観光の絡みはどのようなになっているんですか。

金城◆場所を奈良町に置いたのは、観光客の方にもというのはあるんですけど、元々は地域のコミュニケーションがねらいです。特に奈良市は東部と西部に文化が分かれているんですよ。新興住宅地と市街地と分かれています。そのギャップが激しかったので、コミュニケーショ



ンを図ることが第一の目的でした。それと、地域の情報というのは紙の媒体だけではなかなか伝わりにくい。そこでFMは価値があると。また、奈良でやるからには、観光客の方が減ってきているので、パフォーマンス性のあることをする。それには、アナログな町から最新の情報を流すことがインパクトも与えるだろうし。地元の人と触れることができればいいかなと思っています。

FMをやりながらお土産を売ったり、喫茶店や茶店をやったりと、複合施設にしています。今も、喫茶店に観光客の人が来ると、声を拾ってあげるんです。そしたら、それに対してお便りが来たりね。ラジオをやりたいためにやったのではなくて、ラジオを一つの手段とらえているんです。だから、スタジオを設置する場所にはこだわりませんでした。

濱◆オリент館になったいきさつはどうだったんですか。

金城◆それは偶然オリент館が空いたから。その前に試験放送で、開局する2年前にイベント放送を3ヶ月やったんですよ。市制100周年のイベントを紹介するということで、空家を利用して、その時も畳の上から放送したんです。すると、「町家から放送してるので珍しい」と、いろんなメディアが取材に来て、NHKとも二元中継しました。

ネットTVも始めていて、メディアミックスを進めていきたいと考えています。

(訪問者：赤須治郎、濱博一、高峰博保)

株式会社 奈良シティエフエムコミュニケーションズ

奈良市西新屋町43 奈良オリент館 〒630-8334
TEL 0742-24-8415 FAX 0742-24-8422
URL <http://www.nara.fm/>



地域づくり 交流

サステイナブル・コミュニティづくりとは

「サステイナブル・コミュニティ(SC)の推進」をメインテーマに活動している「特定非営利活動法人NPO政策研究所」に理事長の木原勝彬さんを訪ねた。木原さんは「奈良まちづくりセンター」の前理事長で、関西の地域づくりのリーダーの一人である。持続可能なコミュニティづくりのあり方についてお話をうかがった。

サステイナブル・コミュニティの意義

—— 持続可能なコミュニティというテーマで具体的に取り組まれていることとしてはどのようなことがあるんですか。

木原◆サステイナブル・コミュニティという概念はアメリカで提唱されたんですね。

コンセプトは「地球環境の問題を解決する次の社会の提案」だった。日本ではそういうことに関して動きがなかった。環境に関わる政策が行われているんだけど、身近にならない。「自分達の生活の中や地域の中で、環境問題をどうしていくのか」というリンケージ性ということ、相互性、関連性、循環性を考えた発想ができなかった。

一方では環境基本計画が出来てくるけれど、どうもいきた環境保全ができていない。経済の活性化はできたが、地球環境問題に対しては、やってないじゃないかと。

環境問題をテーマ型でやっていると、地域の現場に根ざしていないということから、持続可能な地域づくりの論議とか手法を整理しないといけないだろうというのが、サステイナブル・コミュニティに取り組んだ理由です。我々の活動は政策形成型ですから、基本的にはそういった議論と整理、いわゆる施策の評価を踏まえながら、提案したのが「サステイナブル・コミュニティ(SC)の推進に向けて」です。

提案から実践へ

木原◆協同の政策形成というのは、政策をこちらから提案をして行って、行政が予算を出して、開かれた形の委員会を編成して一緒に研究を進めていく。その中で、担い手と一緒に勉強しながら提案をしていく。提案の結果として、例えば、CS神戸は

確実に循環型コミュニティづくりをやってます。滋賀県環境生協の藤井さんもやってきます。それが他の地域にも展開されていく。

奈良については交通問題をやってます。交通に関する提案をして、フォーラムを開催し、社会実験をやっている。そういったコミュニティに関わる提案を、講演や研修の場でしていく。リサーチの委託を受けたとしても、必ずフォーラムを開催して、説明責任を果たしていく。



木原勝彬

(特定非営利活動法人NPO政策研究所 理事長)



もうひとつ重要なことは、全国各地でサステイナブル・コミュニティづくりが行われていることに対して、どういった支援システムを作っていくのかを検討しています。

異質な団体をつなぐNPO

—— 限り無く範囲は広いですね。活動分野はいろいろ書いてありますが、「循環型社会の実現」と表現されると、あらゆることが含まれますね。

木原◆大事なのは、すべてができると思うと何もできないんですね。例えば、循環型社会ということで、ゴミのリサイクルとかリユースをやってるグループが地域の経済的な活性化についてはどうすればいいとか、福祉の問題とどう関わってくるのかとかを考えていって、自分達の活動している分野だけでなく、別の分野にも思いをいたしていく。みんなが力を合わせれば、九つの分野でもできるんじゃないか。奈良まちづくりセンターは歴史的な町並み保存で精一杯。本当はいろんなことをやりたいけど、できないですね。できないけど、「センターとどことをつなぐと、地域全体の総合力、問題解決力は高まる」という状況を作っていくようなNPO、それが支援センターだと思う。地域の現場の中で、どういう社会、どういう地域をつくるのか、その時にNPOはどういう力を発揮しないといけないのか。そういうことが必要になる。

特定非営利活動法人NPO政策研究所

大阪市福島区吉野4-29-20 大阪NPOプラザ204 〒553-0006
TEL 06-4804-1142 FAX 06-4804-1143
URL <http://www.jca.apc.org/npa/>

新設された 「みのお市民活動センター」

「NPO政策研究所の理事である直田さんが関わっておられる「みのお市民活動センター」にも訪問。

運営を委託されている「市民活動フォーラムみのお」の事務局長・櫻井あかねさんと直田さんにお話をうかがった。



条例まで策定

市民活動センターができるまでに、条例まで制定しているところが特筆すべきことかもしれない。1999年10月1日に「箕面市非営利公益市民活動促進条例」が施行されています。地方分権を実現するためには市民が地域経営の役割を担っていかねばならないという市長の考えもあって、条例制定に至っている。フレームをしっかり作っておくことにより、市長や担当者が変わっても、実行されるようにということもある。条例の制定を受けて、1999年10月に「箕面市非営利公益市民活動促進委員会」が設けられ、1年以上かけて検討を重ね『みのお市民社会ビジョン21--自治体とNPOの新しい協働のあり方--』を策定（2000年11月）。2001年には市民活動支援センター設立準備会を設置して検討を重ね、『（仮称）市民活動支援センター設立に関する報告書』をまとめる（2001年7月）。さらに、設立準備会に参加したメンバーが中心になり、市民主体の運営で「市民活動センター準備会その後の会」を開催。その成果を受けて、市民団体として「みのお市民活動センターを創る会」を2001年9月に立ち上げる。それが発展して「市民活動フォーラムみのお」になり、2002年1月15日の「みのお市民活動センター」の設置とともに、運営を受託しています。事務局長の櫻井さんは最初の委員会から市民委員として参加して、一環して関わってこられています。

自由に使えるスペース

みのお市民活動センターは市の所有で、管理運営は一括して「市民活動フォーラムみのお」が受託しています。年間の委託費は1600万円。事業費、スタッフの人件費が主な経費ですが、分割で毎月支払われます。



直田 春夫
（箕面文化ファーム 事務局長／
特定非営利活動法人NPO政策研究所 理事）



櫻井 あかね
（市民活動フォーラムみのお 事務局長）

登録すれば、空いてたら、だれでも自由に使えるフリースペースがあります。登録団体もすでに100を超えています。事業としては情報収集と発信に力をいれています。アンケート調査を市から受託し、152団体からアンケートを収集。その成果をふまえ、『グループガイド』を作成し、151団体を紹介しています。

登録団体のチラシや冊子が置ける展示コーナーもあり、ニュースレターも発行しています。フォーラムの会員さんには電子メールかファクシミリでも配信しています。

団体間のネットワークづくり

団体間のネットワークをどのように組んでいくかが課題になっています。アンケートの際に交流の希望をうかがっていますが、他の団体とつながっていききたいという希望が寄せられています。グループガイドをご覧いただいた時に、会いたい団体もあるという声が聞かれますので、大きなイベントでなくても、茶話会的な交流の場を設けられたらと考えています。直接会って話がきけて、盛り上がりれば一緒にやりましょうか、ということになればいい。セッティングだけして、後はそれぞれにお任せすればいいと考えています。いろんな相談ごとやイベントに協力してくれる人の紹介の依頼などもあります。企業と団体をつなぐ場としても機能してゆくことも想定されます。



【箕面文化ファーム】

直田さんはいろいろな活動をされていますが、その中でも「箕面文化ファーム」が特筆すべきことです。市民のグループが集まって市民参加がどうあったらいいかということを研究して、最終的には提言にまでもついでとされています。2年前からはじめて、定期的にワークショップをいろいろなテーマで行っています。「みのお市民まちなみ会議」の事務局もされていて、『まちなみの中の指定樹木マップ』をシリーズで発行されています。手描きのイラストが入った楽しいガイドに仕上がっています。

みのお市民活動センター

大阪府箕面市箕面6-3-1 みのおサンブラザ1号館5階 〒562-0001
TEL 0727-20-3386 FAX 0727-20-3386
URL <http://www8.ocn.ne.jp/~minoh/>

地域づくり 談議



「能登編」

能登半島での情報交流

◆日時：平成14年3月21日(木)

◆会場：春蘭の宿(能都町)

11月に開かれた地域づくりシンポジウム「輪島わんたき」が終わって、帰る道すがら、たまたま同じ車に乗り合わせた、金蔵の石崎さんと、「今日のわんたき良かったね。輪島の盛り上がりが能登半島の盛り上がりにつながるよね」と車中で地域づくりのあれこれ話をしたのがきっかけとなって、地域づくり談議・能登編を開催することになりました。

能登地区にも地域づくり推進協議会に加盟する地域づくり団体がたくさんあり、とりあえず、一度みんなで集まって情報交換をしようということで、談議の場所となった春蘭の里の方々も幹事になっていただき3月21日、能都町 春蘭の宿を会場に「地域づくり談議」能登編が開催されました。

13団体30名が参加した談議では、各団体の活動紹介を始め、現在の課題や今後の活動のあり方について熱心な意見交換が行われました。

春蘭の宿の大広間で車座になっての意見交換はコーディネーターの進行ぶりともあって、それぞれが今抱える問題点とか、地域づくりにかける意気込みとか、ざっくばらんに話し合うことが出来ました。

内容的には、昨年の「輪島わんたき」を通して、地域づくり団体同士が活動分野や市町村を超えてネットワーク(情報交流)することで、新しい活力や活動のアイデアが得られるなどの成果を踏まえ、能登地区においても、こうした成果を生かしていくことが今後の活動において非常に有意義ではないかということで、情報交換の場を定期的に開催することで全体の意見の一致を見ました。

ちなみに、今年度は、秋に金蔵を会場に「地域づくり談議・能登編」開催を呼びかけようという話になっております。

第1部の談議の中身も濃かったのですが、引き続き行われた夜なべ談議も、春蘭の里ならではの山菜あり、きじなべありと婦人部手料理のごちそうに舌鼓を打ちながら杯を重ね、一段と地域づくりの論議に話が咲きました。

(岡崎善二/FMラジオで能登を一つにする会)

「金沢編」

健康と子育てと地域づくり

◆日時：平成14年3月8日(金)・3月15日(金)

地域づくりは人づくりである。地域づくり談議「金沢編」では「健康と子育てと地域づくり」と題して、住み慣れた地域で元気に暮らしつづけ、次代の地域づくりを担う人を育てる談議を開いた。

3月8日、1回目は石川の参加型子育て雑誌「子育て向上委員会」を発行している長谷川由香さんに来ていただき、まず金沢での子育ての体験から見てきたものを話してもらった。参加者は、小さな子どもたちに絵本の読み聞かせを長年続けている50代の女性や、子育て生活応援団を立ち上げた育児サークルのリーダーなどで、それぞれに、すでに活動の場を持ち、積極的に動いている方たちが多く集まったので、内容の濃い談議になった。子育て真っ最中の若い親のニーズを敏感にとらえ対応し、ちょっとした先輩としてのアドバイスをする事の大切さ、公民館や町内会に育児世代の声が反映

されない現実などが見えてきた。談議終了後、進行サポートとして参加していた地域づくり協議会の男性スタッフが、子育てについて目から鱗の話が聞けたといていた言葉に、現代の子育ての問題点と解決の糸口が隠されているように感じた談議だった。これからは子育ても男女共同参画ということだ。

3月15日、2回目の「まちぐるみで健康アップ」は、花岡美智子さんを囲んでの談議で、健康生活チェックや簡単にできる体力チェックをやりながらの楽しいものだった。開かれた教育機関の実践をめざす花岡さんは、県立看護大学健康体力科学の教授だ。参加者全員がウーンとうなるほど全国的に石川県の実績医療費は高く、石川県の人たちがこの1年間に運動やスポーツをどの程度しているかのアンケート調査の数字レベルは低かった。「5年先、10年先の病気予防を考えて今から実践してほしい」と結ばれた。「健康と子育てと地域づくり」は引き続き取り組みたいテーマである。

(広岡立美/家族とくらしの会)

地域づくり実践講座

石川県地域づくり推進協議会では、地域づくり団体・グループの活動を側面から支援する研修制度・専門家の派遣などの支援メニューを用意しています。
地域づくり実践講座は、地域横断で地域づくりに関わっているメンバーに集まっていただき、地域の当面する課題について実践的に考える場として開催しています。

[輪島編]

- ◆日時：平成14年2月23日(土) 午後1時15分～午後5時45分
第1部／地域づくりシンポジウム「わんたたき」反省会
第2部／NPO入門講座
第3部／交流会
- ◆会場：輪島市働く婦人の家
- ◆講師・コーディネーター：濱 博一（アスリック）

2月23日、輪島でなんと第3部まである、コーディネーターの濱さんに言わせると「非常に欲張りな」実践講座が開かれました。昨年11月17日輪島で平成13年度の地域づくりシンポジウム「わんたたき」が行われましたが、その「反省会」と、「次の勉強」（地域づくり活動を発展する方策としてのNPOの有効性）をしようということで、分科会を開催した団体から主だった皆さんが20名ほど集まり開かれました。

全く最後の交流会まで、息つく間もない、休憩時間も腕時計を見ながら計るという充実した一日でしたが、更に話は続くことになりました。

先ず第1部。3班に分かれてワークショップ形式で行いました。主な意見は次のとおりです。

[主な反省点]

○事前準備関係

- ・分科会コーディネーターと地元担当との打ち合わせの密度が不足していた。
- ・地元にもコーディネーターが必要。

○当日会場関係

- ・「わんたたき」のテーマが生かされていたか。
- ・地元からの発言が少ない。
- ・会場案内図が不足していた。

○当日全体会関係

- ・全体会が平面的で工夫不足。

[主な良かった点]

- ・地域外の方から刺激を受けた。
- ・輪島らしい食材、自然環境に触れることができた。
- ・真剣であった。（逆に後から来た人は議論に入り込めない堅苦しい雰囲気があった。）
- ・分散会場で各所を見て貰えた。（逆に時間的制約があり掛け持ちが出来なかった。）

[改善提案]

- ・地元の人材を育成する。（地元コーディネーターとして。）
- ・案内地図は広域的にする。
- ・全体会と交流会会場は同一にすべき。（移動時間・雰囲気持続のロス。）
- ・全体会に「参加者に参加してもらう工夫の充実」（全体会を双方向に。発表に、例えば寸劇が出来るような工夫の余地と準備を入れる。）

内容の一つ一つに重みがありますが、なぜシンポジウムを開催するかというと、なんと言っても地元の地域づくり運動が発展することにあると思いますので、地元の地域づくり団体の皆さんがこのような前向きな意識を持たれたということは大きな成果であったと考えています。次回からのシンポジウムに役立てて頂きたいと思います。

次に第2部。濱さんの名講義でした。IOC(国際オリンピック委員会)もNPOという話から始まり、NPOとボランティアの違い、社会貢献とお金の問題、実はアメリカよりも日本の方がNPOについても歴史があるという話や経営の実態という内容を経て今後の展開へと進みました。

その中で、NPOとは志のある普通の人々がそれを社会的に、継続的に実現する制度なのだという趣旨の部分があり(私の勘違いかも知れませんが)心に残りました。そうか、NPOも職業倫理なのだという独断に満足しています。NPOって素敵ですね。

最後に第3部。

皆さんの「持論」を前に、地域づくりについて話が百出しました。一体全体どう落ち着くのかという気もしましたが、濱さんを中心に皆さん次のようにまとめました。

奥能登地区を中心とした諸団体間で、

- ・情報交換：困難を乗り越える知恵の交換、活力の交歓。
- ・自地区へのお客さんに相互の地区を紹介しあう「ネットワーク」の形成などを旨として団体連絡会を開催する。開催地は持ち回りとする。

そして、予定されている3月21日の談議でこの話の続きをする。

以上のように時間をフルに使って議論が進み、終わりにも大きな成果がありました。

今日は最後まで「志」の日だったなと、心地よい疲労感に浸ったものです。

(坂下利久／輪島市総務部企画課)



第16回地域づくり団体全国研修交流会 [群馬大会]

平成14年2月15日・16日



ドメスティック・バイオレンス 被害者支援ネットワークに向けて

パートナーシップで進める環境まちづくり

「認めあう力、響きあう心」をスローガンとして群馬大会が開催されました。

昨年から地方分権の実行段階に入っており、自立的な地域づくりを住民主導で実施するには、私自身がどの様に携わっていけばいいのか教えてもらいたくて、「パートナーシップで進める環境まちづくり」の分科会に参加させていただきました。

この分科会では、環境をテーマとした活動に取り組む諸団体の活動事例報告をとおして、住民・行政・企業のパートナーシップや環境教育の進め方などについて話し合いました。

具体的には、鮭の放流事業を大人・子ども・行政が連携して環境を考慮したまちづくりを自ら取り組むことによって、環境に携わることの大切さを痛感したと言う事例発表を聞いて、自分たちのまちは自分たち自らで守ろうとする意気込みが伝わり、「参加・協働型」の活動を心がけていることのすばらしさに心を打たれました。

まちづくりのキーワードは、楽しく遊び、学び、助け合うことにより、お互いの存在や価値を認め合うこと。まずは、自分起こしから始めないといけないんだということを学びました。

2日目には、各分科会からの報告の中で明らかになった課題をもとに、全体で議論を深めました。皆さんの積極的な仲間づくりの話を聞いて、自分が何もしていないことを反省しました。

そして、この研修会に参加したことを契機に、地域住民・女性として自分のできるところから考え、行動に移して行くことを心に誓いながら帰途に着きました。

(小島恵子／七尾市)

「地域づくり」をコンセプトにした多岐にわたる分会、分科会11の中から、高崎分会浅間分科会「ドメスティック・バイオレンス被害者支援ネットワークに向けて」に参加した。主催者は「安全安心な街づくり」をキーワードに「DV(ドメスティック・バイオレンス)」「身近なパートナーから受ける暴力」の現状と解決の糸口を「調査報告」「寸劇」「意見交換」の組み立てで構成した。被害を受けた女性の人権を守る「性暴力問題群馬弁護士ネットワーク」そして暴力への具体的対処の方法を子ども達と考える教育プログラムを提供している「CAPinぐんま」の2チームの共同企画だった。

「寸劇」は二幕5場あり、被害者の相談に対応する悪い事例から演じられた。弁護士、相談員、警察などの対応が、加害者の立場になってしまう事例である。2場では主人公が殴る蹴るの夫からの暴力を受けるシーンが演じられた。主催者が「つらい人は外に出るように」と勧めたのはとても印象的だった。そして、被害者がDVであることを見抜く医者適切な対応や、相談員からの理想的なアドバイスを主人公は得て、約40分の「寸劇」は終わった。

休憩を挟んでの「討論会」での山場は「女性」対「男性」のDVへの認識の格差だった。前提としての「ジェンダー」(社会的文化的に作られた性の違い)からフリーな女性の価値観の前では、男性側の性意識を「すり込まれた価値観」と一蹴することはたやすく、それでも「女性からの暴力もあるのではないか?」と男性側がこだわってしまう討論の流れに、「原因を追求する段階より、現実をみつめ、何ができるかを考えるべき」「対立ではなく、男女の良い関係をつくり、支えあおう」と主催者は結んだ。

高崎警察生活安全課の警察官や民生委員、弁護士、民間シェルター(被害者を匿い自立支援する機関)の全国ネットワークづくりを呼び掛けた「鳥取県女性史を考える会」の参加などで、具体的支援の法律的な整備などが一部では進んでいることを感じる一方で、呼び掛けの視点を一歩履き違えると「男性の否定」と錯覚されそうな表現の難しさも感じた。

このような企画は、格差こそあれ、男女が共に「傷みを共有できる関係」をもうひとつの前提としなければ、他人の問題を実感共感できないのかも知れない。

(青海康男／いしかわ市民活動ネットワークセンター)



編集後記

確実に変っている。時代は大きく変化し続けている。未来のことを考えると、若い世代に伝えるものは伝え、任せることは任せて、新しいステージを自ら創り出してくれることを期待したい。それが先に生きるもののつとめではないか。(高峰)

石川県地域づくり推進協議会 情報誌

MyPage

Vol.10 2002年3月発行

発行

石川県地域づくり推進協議会

事務局／石川県総務部地方課振興係内
金沢市広坂2-1-1 〒920-8580
TEL076-223-9058 FAX076-223-9486
E-mail: chiki1@pref.ishikawa.jp
URL http://www.pref.ishikawa.jp/tihou/